

アジア太平洋地域における 観光研究の傾向

— 観光研究の国際化に関する意見交換会より

公益財団法人日本交通公社 観光文化情報センター 企画室長・主任研究員 福永 香織

当財団では、2015年度に自主研究「アジアにおける観光研究の潮流に関する調査」を行った。その一環として2016年2月16日(火)に台湾・天主教輔仁大学民生学院餐旅管理学系教授の蘇哲仁氏をお招きし、意見交換会を開催した。

蘇教授は、「Service Business: An International Journal」などの編集委員の他、Euro-Asia Tourism Studies Association (EATSA)の副会長も務めており、台湾のみならずアジアやヨーロッパなどで広く活動されている。昨年、台湾の観光研究の潮流(詳しくは観光文化228号「特集・アジアの観光研究の潮流」参照)についてヒアリングをさせていただいた関係で、今回の企画が実現した。

蘇教授からは、アジア太平洋地域における近年の観光研究の潮流、日本の観光研究に対する国際的な視野からみた示唆、学術ジャーナルの傾向などについて話題提供をいただき、その後、当財団の研究員からの質問に答えていただく形で意見交換を行った。

△蘇教授のお話のポイント△

- ・近年(2011~2014年)のアジア太平洋地域における130本の論文の傾向が整理されている論文(Fong, L. H. N., Au, N., & Law, R. (2015). Recent Research in Asia Pacific: The Case of a Professionally Affiliated Journal. *Journal of Travel & Tourism Marketing*, 32(3), 161-179)によると、近年の研究テーマとしては、マーケティング、経営戦略、人材マネジメント、持続可能な開発、ツーリズムインパクトの順に多くなっており、データの収集方法としては、アンケート調査、インタビュー、文献調査の順に多くなっている。
- ・国別の相対的貢献度としては、香港、オーストラリア、台湾、アメリカ、中国、韓国、ニュージーランドの順に多くなっている。
- ・日本の観光研究の国際化に向けては、海外の学術ジャーナルとの関係構築、柔軟で多様な学術連携、英語での情報発信の構築などが重要になると考えられる。また、日本の観光産業の強みである分野(サービスやシニアマーケットなど)の研究をさらに進めていくことも重要である。
- ・研究の質を高めていくためには、好奇心を持ち、創造力・忍耐力・執筆力などを高めていくこと、目標を決めること、他の組織や研究者と積極的に連携や共同研究を行うことなどが重要である。

●意見交換会より

研究員 研究論文の発表媒体について、何か特徴的な現象は起きているか。
蘇教授 インターネットがなかった時代、読者は出版社から冊子を購入し

なければならなかったが、今の時代においては出版社のサイトからデータを有料でダウンロードする形になっており、それがジャーナルを扱う出版社のビジネスモデルになっている。例えば、私が編集しているジャーナルはSpringer社に属しているが、

ここは他にも多くのジャーナルを出版している。ジャーナルを発行する出版社の多くは、よりブランド力が高めるため、多様なジャーナルを取り込もうとする。そして自社のジャ

ーナルであれば善し悪しにかかわらず積極的に売り込みをする。さらには、最近ではオンラインショッピングの感覚で、関連商品を次々に紹介するクロスセリングの手法を活用した



ジャーナル販売も行われている。このような出版社のやり方に対して学術面での懸念も出てきているもの、そういったところに巻き込まれなければ自分の書いたものが多くの人の目に触れないという問題がある。

多くの研究者は、SSCI (Social Sciences Citation Index) (注1)の掲載ジャーナルに自身の論文が掲載されることを目標としており、このように論文の発表数や掲載数を重視するのは、アメリカ式の考え方が大きな影響を与えているといえるだろう。一方で、こうした出版社はノウハウがあるので、日本のジャーナルについてもどのようにレベルアップさせて、どのように拡大させていけばよいかという点については様々なアイデアを持っていると思う。まずは海外のジャーナルの特性を見ながら、英語の論文を投稿していくことから始めて、将来的に公益財団法人日本交通公社(以下、JTBF)も英語版のジャーナルを発行することを検討すればよいのではないか。

研究員 観光研究の傾向としてはア

メリカとヨーロッパでは違いがあるか。

蘇教授 異なると思う。特に、ヨーロッパでは年配の研究者と若い研究者では考え方が異なるようだ。かつては、フランスの研究者は英語を使いたがらなかったが、最近の若手研究者は英語で論文を書くようになってきている。その理由としては、特にマーケティングの分野の研究が発展しているアメリカの影響を受けており、自身の論文がSSCIジャーナルに掲載されることを望んでいるためである。しかし、年配の研究者は自身にとつての研究の面白さを優先し、よりマクロな研究に焦点を当てるスタイルが多い。

イギリスのPalgrave Macmillan社が出しているAsian Business & Managementというジャーナルは、同志社大学の教授によって創設されたものである。Asian Business & Managementで取り上げられているテーマはアジアに関するものも多く、日本や中国に関する研究も多い。社会学のカラーが強く、どちらかというとアメリカよりもアジアやヨーロッ



蘇哲仁 (Che-Jen Su, Ph. D.)

天主教輔仁大学 民生学院 / 餐旅管理学系 教授

1986年天主教輔仁大學卒業。1992年國立臺北大學にてMBA、2001年に博士号取得。朝陽科技大學准教授、天主教輔仁大學准教授、韓国の漢陽大學教授などを経て、2013年より現職。Journal of Global Business and Technology 地域編集者、European Journal of Tourism, Hospitality and Recreation, Service Business: An International Journal (SSCI Indexed) 共同編集者、Euro-Asia Tourism Studies Association (EATSA) 副会長。ブルゴーニュ大学、香港城市大学、和歌山大学などでの客員教授経験も持つ。

パの影響を強く受けている。SSC Iジャーナルでもあるため、日本からアプローチしていくにはよいと思う。

研究員 アメリカの学会発表では、定量分析による論文が多いように感じる。定量的な分析の方が好ましいのか。

蘇教授 定性的な研究手法を用いた論文の場合、査読者によって評価が分かれる可能性があるのに対し、定量的な分析の場合は系統的かつ客観

的であり、評価が定まりやすいという特徴はある。定性的な分析の場合も、個別の事例紹介にとどめず、ヒアリングやアンケートなどにより多様な分析を行えば良い研究になると思う。また、新しい分析ソフトなどをを用いることも有効だろう。例えば過去5年間の新聞を調査し、旅行者の役割変化などについて分析するといった研究も考えられる。20年前であれば全ての記事を読まなければならなかったが、今ではソフトを使えば何千もの新聞を簡単に分析す

ることができる。もちろん、完全な手法がある訳ではないが、こうしたソフトの進化のおかげで、多様なデータが活用できるようになった。

J T B Fには良いデータベースと実践事例が多くあると思うので、それらを使えば様々な研究を行うことができるはず。そして、こういったテーマに関心のある研究者や、共同研究ができる人を世界中から見つけてほしい。データや考えを提供することにより研究に貢献することができるし、研究効率も高まるのではないか。

研究員 研究の成果を実践に活かすための方策や連携について何かアドバイスをいただけないか。

蘇教授 最近では実践との関連性が無い論文は受け入れられない傾向にある。ジャーナルの数も増えて競争も激しくなっている昨今においては、要約版を作成して、大学の学生や研究者のみならず、より幅広い方々に読んでもらえるようにすることがトレンドになっている。難しいことではあるが、我々もその点のバランスにつ

いては考えていかなければならない。J T B Fは実践的な研究は得意であると思うし、最新の動向を追っているのも、産業界の人たちにとっても興味深い、良い研究テーマが見つかるだろう。重要なことは、的確にテーマを捉えることと、実践に貢献する研究であるということを実践に貢献することである。

● 昨年の調査に加え、この意見交換会により、世界の観光研究とジャーナルに関する潮流についての理解が深まった。

海外の研究成果を一方向的に参考にするだけでなく、自分たちの取り組みや研究成果をオープンにすることで、他国の研究者との議論が活発化し、日本国内では得られない気づきや研究の深化があるのでないだろうか。また、それを実践の場に伝えていくことも我々の重要な役割であると実感した。

(ふくなが かおり)

(注) <http://ipscience.thomson Reuters.com/>